

日本の医学生が見た MD Anderson

慶應義塾大学医学部 5年

久野 真弘

この度、私は慶應義塾大学医学部の「短期海外臨床実習」というカリキュラム期間に、MD Anderson Cancer Center (MDACC) Breast Surgical Oncology へ一ヶ月間、Observerとして留学しました。MDACC で学んだことは多々あります。本報告書では「日本の医学生が MDACC を訪れる意義」という点に焦点を当て、以下の 2 点について報告します。

- ◆ MDACC で印象的だった「患者-医療者の信頼関係」について
- ◆ 医学生のキャリア教育における MDACC 留学のメリットについて

① MDACC で印象的だった「患者-医療者の信頼関係」について

MDACC は毎年全米のがんセンターランキングで上位にランクインしております。その理由は単一のものではなく、優秀で熱意溢れる医療スタッフ、臨床試験の質と量、Nurse Practitioner というシステムの存在、大規模な施設、等、複合的な側面から評価されています。実際に留学を通じて、上記の要素全てが一つの目的、「患者-医療者間の徹底した信頼関係作り」に集約していくことを実感することができました。

医師は診察中 PC ではなく患者の眼を見て、身体に触れ診察をします。カルテは音声入力で自動作成されます。カルテ作成の時間が短縮されるため、患者は自分が納得するまで徹底して質問ができる上、医師もそれを促しています。生存率や治療方針が分かりやすくまとまったアプリを利用することもあります。外科・内科・放射線科でチームが構成され、全員で治療方針を確認し患者に説明しに行きます。外来の外にある患者図書館では資料や講義が充実しています。One on One という、似た境遇の患者を探し出しマッチングさせるシステムもあり、精神的なサポートも充実しています。患者にとって「こんな医療施設があったらいいな」と感じるものが全て実践されているのです。日米で保険制度を始めとする医療制度が異なるため、全てを取り入れることは叶いませんが、一部は日本流にアレンジして持ち帰ることができると感じました。

② 医学生のキャリア教育における MDACC 留学のメリットについて

MDACC では多くの日本人医師が、臨床又は研究留学で働いています。日本にいと、卒後 1~6 年目で専門医取得過程の先輩方や、もしくは教授の方々と交流させて頂く機会しばしばあります。一方、その間のキャリアを歩まれている先生との交流は減多になく、特に海外留学されている先生とは（日本にいらっしやらないので当然ですが）知り

合う機会すら存在しません。ここを穴埋めしてくれるのが留学です。そして特に MDACC には優秀な日本人医師が集結しており、どの方も passion に溢れる熱い方々でした。中には、相手の立場に立って冷静に進路を相談して下さる、まさに Mentor をお願いしたくなる先生との出会いもありました。

MDACC の Vision & Mission である”To Eliminate Cancer”は有名ですが、実が従業員の多くも、各々に自分の vision を定めています。パナソニックの創業者である松下幸之助はかつて「志を立てよ。さすればことは半ば達せられている。」という言葉を残していますが、MDACC で出会った先生は皆それを体現されており、その vision の深さに感化される日々でした。

MDACC を訪問することは、大学 1 年時に Harvard Business Review で MDACC の特集を読んでからの目標でした。今回留学が実現したのは、偏に多くの方々に支えられたからでありました。Mentor であり常に背中を押して下さる佐谷教授(慶應義塾大学医学部先端医科学研究所)、懇切丁寧にまるで親のように面倒を見て下さった石澤先生(MDACC Leukemia Department)とそのご家族、そしてアメリカの医療を魅せて下さった上野教授(MDACC Breast Medical Oncology)、全ての方に心から感謝申し上げます。

